

城西大学薬学部 白瀧 義明 (SHIRATAKI Yoshiaki)

アケビ *Akebia quinata* Decaisne (アケビ科 Lardizabalaceae)

4月になると、人里近い山裾の茂みに紫色の花を付けたつる性の木本を見かけます。下に垂れさがる総状花序に雌花と雄花をつけ、大きい雌花が花序の基部に、小さいいくつかの雄花が先端につきますが、花弁のように見えるのはがく片で、雌花、雄花ともに花弁はありません。小葉は普通5枚、長楕円形、長さ3~5cm、鋸歯はなく、先が少しへこんでいます。秋になると、大きな楕円体の果実ができ、果皮はやがて1ヶ所で縦に割れ、中から白くて柔らかい果肉が顔を出します。アケビの名は大きく口を開けた独特の実の形「開け実」が変化して生まれたとする説が有力です。

アケビのつるは上から見て左巻きに伸び、人家の生け垣でも良く見かけます。同属植物のミツバアケビ *A. trifoliata* Koidz. も、よく見かけますが、両方とも果肉を食べるだけでなく、若芽も果皮も山菜として、その独特のほろ苦い味が好まれ、山菜料理等によく使われます。ミツバアケビのつるは東北地方や信州では、かごや玩具などの民芸品の素材としても重用されています。アケビは北海道以外の日本各地に分布しますが、ミツバアケビは、北海道西南部まで分布し、小葉が3枚、数個の鈍鋸歯があるのが特徴です。花は暗赤紫色、雄花、雌花ともにアケビより小さくて花の色は濃いのですが、一方、果実は大きく、長さ10cmを超え、熟すと濃紅紫色を帯びます。我が国に分布するアケビ属植物にはほかに小葉が3~5枚あるゴヨウアケビ *A. lobata* Decne. var. *pentaphylla* Makino がありますが、アケビとミツバアケビの自然交配による雑種と考えられています。アケビ、ミツバ



写真1 アケビ (花)



写真2 ミツバアケビ (花)



写真3 ミツバアケビ (果実)



写真4 ムベ (花)

アケビとも、落葉する11月頃、直径2cm位の木質化したつるを採集し、厚さ2~3cmに輪切りにして日干しにしたものを「木通(もくつう)」といい、漢方では、利尿、通経、消炎を目標として消風散(しょうふうさん)、竜胆瀉肝湯(りゅうたんしゃかんとう)などに処方されます。成分はサポニンのアケボシド akeboside Ste やカリウム塩を含んでいます。

同じアケビ科の植物に、ムベ *Stauntonia hexaphylla* (Thunb.) Decne. があります。ムベは、常緑のつる性木本でトキワアケビともよばれ、関東地方以西の本州に分布します。葉はアケビ同様、掌状複葉で、成熟したつるでは、楕円形で長さ6~10cmの小葉が5~7枚つきますが若いつるでは3枚しかつきません。そこで七五三にちなんで、おめでたい木とされてきました。花は4~5月頃、総状花序の先に、雄花と雌花がつきますが、黄白色の広披針形の花弁のように見える部分は外がく片です。秋には楕円体の硬い液果ができ、アケビのように裂開はしないものの食べられます。

アケビ科植物は世界に8属約30種が知られ、東アジアに6属、遠く離れた南アメリカに2属が分布しています。このように、地球の遠く離れた場所に分布するアケビ科植物の隔離分布は古くから植物地理学上の謎の一つとなっています。



写真5 ムベ (果実)